



**Data** 2022-24

監督・脚本: ジャスティン・チョン  
出演: ジャスティン・チョン/アリシア・ヴィキャンデル/マーク・オブライエン/リン・ダン・ファム/シドニー・コウ  
オルスケ/ヴォンディ・カーティス=ホール/エモリー・コーエン

## 👁️👁️ みどころ

米国に住む韓国人監督ジャスティン・チョンが実話にヒントを得て、国際養子縁組のテーマに挑戦！

家族と共に暮らしたい。ただそれだけなのに、なぜ国外退去命令を？3歳の時に養子として米国へ。以降30年以上米国人として生活し、今は美しい米国人の妻も子供も。家だって小さいが戸建てだ！！

タイトルの意味は、スクリーン上に何度も登場する幻想的な湖のシーンや、美人女優アリシア・ヴィキャンデルがステージ上で歌うシーンから、しっかり考えたい。

弁護士の私は弁護士報酬に固執する米国の弁護士の姿に反感を覚えたが、現実には現実。国際養子縁組を巡る法的問題点を、本作からしっかり学びたい。

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*

### ■□■テーマは国際養子縁組！韓国系米国人が監督・主演！■□■

移民問題や国籍問題はビザ制度の在り方と共に国によってさまざまだが、“自由の国アメリカ”の永住権や国籍の取得は多くの外国人の夢。60年前のロバート・ワイズ監督作品をスティーブン・スピルバーグ監督がリメイクした『ウエスト・サイド・ストーリー』（21年）では、ヒスパニック系の移民問題が焦点になっている。

近時先鋭化する“米中対立”の中でも、生まれてくる子供に米国籍を取得させたい富裕な中国人妊婦を対象に、アメリカへの“出産ツアー”を企画運営するケースが増えている問題が報道された。他方、韓国人青年がアメリカの永住権を手に入れるため偽装結婚を繰り返す問題を真正面からテーマにした韓国映画が『ディープ・ブルー・ナイト』（84年）（『シネマ2』233頁）だった。近時の韓国映画の元気さは、ポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』（19年）（『シネマ46』14頁）や、リー・アイザック・チョン

監督の『ミナリ』（20年）（『シネマ48』30頁）等で顕著だが、韓国系アメリカ人ジャスティン・チョンが監督兼主演した本作も、そのテーマは国際養子縁組問題だ。

本作のチラシには「家族と共に暮らしたい。ただ、それだけ。」韓国で生まれ、わずか3歳で遠くアメリカに養子に出された青年アントニオ。30年以上前の書類の不備で強制送還される危機に瀕した時、彼はどうするのか？」と書かれている。本作のテーマは、ズバリ国際養子縁組だ。アメリカでは2000年に国際養子縁組による養子に市民権を与える、子供市民権法（Child Citizenship Act of 2000）が成立したものの、適用範囲が限定的だったため、2015年以降、救済策となる法案がたびたび連邦議会に提出されたそうだが、そして2021年には、すべての養子に市民権を与える養子市民権法案（The Adoptee Citizenship Act of 2021）が与野党議員によって上下両院に提出されたそうだが、さて、現実は何？

なるほど、なるほど、こりゃ面白そう。近時の国際情勢をふまえ、こりゃ映画評論家としても弁護士としても、必見！

## ■□■良き夫、良き妻、良き娘だが、この家族には大問題が！■□■

本作冒頭、一家の生活をより良くするため、本業のタトゥーアーティスト以外の職探しをしているアントニオ・ルブラン（ジャスティン・チョン）の姿が登場する。アントニオは妻キャシー（アリシア・ヴィキャンデル）と7歳の義理の娘ジェシー（シドニー・コウォルスケ）と共に暮らしているが、キャシーは現在妊娠中。舞台はアメリカ南部のニューオーリンズ州だ。アントニオ一家の住まいは、ニューオーリンズの伝統家屋であるショットガンハウス。それは、間口の狭い細長い家屋で、部屋は縦一列に並んでいるそうだが、庭付きの一戸建てだし、車も保有しているから、それなりに安定した生活を？一瞬そう思ってしまうが、それは誤解だ。

ある日、アントニオたち一家がスーパーで巡回中の警察官エース（マーク・オブライエン）とその相棒デニー（エモリー・コーエン）に遭遇すると、デニーはエースの個人的問題に介入し、アントニオに難癖をつけて暴力的に逮捕してしまったから、アレレ。しかもアントニオは警察署からICE（移民関税執行局）に引き渡され、「国外追放命令」を受けてしまったから、さあ大変。「俺は韓国生まれだが、3歳の時に養子としてアメリカに渡り、30年以上もアメリカに住んでいる。」「アメリカ国民であるキャシーと結婚もしている。」とアントニオは叫んだが、それなのに、なぜ国外追放命令を？

他方、ジェシーは実の父親エースを嫌い、アントニオを慕っていたのはハッピーだが、アントニオとキャシーの間に生まれてくる子供に嫉妬し、「アントニオはいつか自分を捨てるのでは？」と発言していたから、ちょっとヤバイ。さらに、エースは父親としての面接交流権を主張し裁判まで起こすと宣言していたから、アントニオ一家の前途はそれぞれ多難だ。さらに、アントニオが面接を受けても採用されなかったのは、バイク窃盗の前科2犯があるため。「今は悪い仲間とは縁を切っている！」といくら叫んでも、世間が彼を見る

目は・・・？

## ■□■物語は超現実的だがタイトルは？幻想的な風景に注目！■□■

本作は現実には起きた問題にヒントを得て、ジャスティン・チョン監督が脚本を練り、自ら監督、主演した映画だから、一方では、国際養子縁組を巡る問題点を赤裸々に抽出し、他方では、「家族とともに暮らしたい！ただ、それだけ！」というアントニオの悲痛な叫びを、いかにも韓国流のアクの強さで表現していく。ジェシーの親権を巡って裁判をする！と叫ぶエースが、ラストに向けて意外にいい男になっていくのは少し意外だが、その分、相棒のデニーがトコトン悪役になるから、アントニオの現実がチョー厳しいことに変わりはない。

3歳の時から30年もアメリカに住んでいながら、アメリカの市民権を取得していないのはアントニオのせいではなく、正式の手続を取るのを怠っていた両親（養親）の落ち度だが、今更それを言っても仕方なし。現実には現実だ。アメリカには私のような「意気を感じて弁護士を買って出る」弁護士はいないようで、バリー・パウチャー弁護士（ヴォンディ・カーティス＝ホール）は、出国して海外で在留資格を得るか、とどまって控訴するか、という2つの選択肢を示しつつ、弁護士料5000ドルの請求もしっかりと。金を払わなければ弁護してくれない。そうなれば、アントニオはどうやって必要な金を準備するの？それを巡って、スクリーン上では超現実的なストーリーが展開していくことに。

他方、本作のタイトル『ブルー・バイユー』とはどういう意味？ちなみに、「バイユー」は「Buy you」ではなく「Bayou」。これは「入江」、つまりアメリカ南部のミシシッピ川の支流などが海に出る入江や湿地帯のことで、「The Bayou State」といえば、ルイジアナ州とミシシッピ州を指すらしい。また、ロイ・オービソンが歌ったヒット曲のタイトルとしても有名らしい。本作では再三、そんなタイトルを彷彿させる美しく、幻想的なシーンが登場するうえ、キャシーが『ブルー・バイユー』を歌うシーンが登場したりするので、それにも注目。もっとも、これはちゃんと解説してくれなければ日本人にはわからないはずだから、ジャスティン・チョン監督は少し不親切では？

## ■□■ベトナム人女性が登場？それはなぜ？その賛否は？■□■

韓国映画はストーリーの中に、あっと驚く展開を見せることが多い。それは本作も同じで、少しでも仕事と収入を増やすべく、街の中で「タトゥーをしませんか！」と勧誘していたアントニオに引かかった（？）のが、ベトナム人女性のパーカー（リン・ダン・ファム）だ。アジア系の女性であることは明らかだが、いかにも上品で富裕層の雰囲気を持っているこの女性が、なぜアントニオにタトゥーをしてもらう必要があるの？また、本作のストーリー構成上、なぜベトナム系の女性、パーカーを登場させる必要があるの？私にはそんな疑問もある。まさか、美しい妻キャシーと共になんとかアメリカにとどまろうと頑張っているアントニオがパーカーと浮気するストーリーに？いやいや、それはないはずだ。

本作の舞台になった南部のニューオーリンズ州には、ベトナム人の広大な居住地があるらしい。当初、アントニオがパーカーの首に施したタトゥーは小さなものだったが、それを通じて2人の間には、同じアジア系人種としての“心のつながり”が生まれたらしい。そのため、アントニオとキャシーはパーカーが家族と共に住んでいる大きなお屋敷のパーティーに招待されることになったが、私はその大きさにビックリ！しかし、同じアジア系とはいえ、アントニオとは全く違う、そんな富裕な家のお嬢様であるパーカーが、なぜ手首にタトゥーを・・・？

それは、ある日、美しいおかつぱ風のパーカーの髪の毛がカツラであることが判明する中で明らかにされるので、それはあなた自身の目で、しっかりと。

### ■□■養母の出廷で逆転判決？いやいや、それは甘い？■□■

『リリーのすべて』（15年）『シネマ38』（43頁）の素晴らしい演技で見事アカデミー賞助演女優賞を受賞したアリシア・ヴィキャンデルは、私の大好きなスウェーデン出身の美人女優。そんな美女が、なぜ子連れでアントニオと再婚し、アントニオの妻キャシーとして献身的に尽くしているの？そんな姿が本作では印象的だ。また、本作では彼女が新たにアントニオの子供を産もうとしているため、キャシーと前夫の子供であるジェシーと義父になったアントニオとの微妙な距離感も興味深い。本作では、そんな微妙な妻役、母親役をアリシア・ヴィキャンデルが熱演しているので、それに注目！

他方、本作後半、「国外追放命令」を取り消すための裁判手続で、アントニオが長い間会っていない養母が証人として出廷してくれるか否かが大きなポイントになる。弁護士から勝訴のためにはその出廷が不可欠と言われても、暴力的な養父を止めもせず、一貫して俺にあんなに冷たかった養母を今さら……。アントニオがそう考えたのは当然だが、さあ、彼の決断は？アントニオが車で養母の家に向かい、再会を果たすシークエンスに注目だが、その話し合いを見ている限り、養母の出廷は絶望的……。さらに、アントニオにとってそれ以上に不可欠なことは、弁護士費用の捻出だ。そのためにアントニオがとった行動はある意味ナンセンスだが、日本のような法律扶助制度のない（？）米国では、それも仕方なし？

そんなこんな展開を見れば、本作ラストはアントニオが涙ながらにキャシーやジェシーと別れ、国外に退去していくシークエンスに？そう思わざるを得ないが、そこにいろいろと“あっと驚く”感動的なストーリーを織り込むのが韓国映画であり、ジャスティン・チョン監督の流儀だ。感情移入度が高すぎる感がしないでもないが、そんな感動的なラストは、あなた自身の目でしっかりと！

2022（令和4）年3月7日記